

2022年2月6日（日）主日朝礼拝説教

『神の子たち』井上隆晶牧師

I ヨハネ 2 章 28 節～3 章 3 節、ヨハネ福音書 1 章 6～13 節

①【手紙の背景にはグノーシス的キリスト教がある】

今日はヨハネの手紙からお話をしましょう。ヨハネの福音書と、ヨハネの手紙というのは用いられている用語や思想が非常に良く似ているので、同じヨハネという人物が書いたと言われていました。ただ近代の研究では、このヨハネという人物は、12使徒のヨハネではなく、小アジア（今のトルコ）のエフェソという町にあった教会の長老（監督＝今の司教・主教）ヨハネではないかと言われています。既にこの町にはヨハネを中心とする教会群（家の教会）がありました。第二ヨハネ、第三ヨハネの手紙を読むと、あて先が婦人と、ガイオという人になっています。多分、家の教会の管理責任者だと思います。自分の家を解放して教会にしていたのでしょう。ヨハネは最初に福音書を書き、その後に手紙を書きました。福音書が80年～90年に書かれていますから、手紙は1世紀末前後に書かれたようです。手紙を書くのはだいたい何か問題が起こったからです。どんな問題かという「グノーシス」という教えが教会に入ってきて、多くの人が惑わされたようです。彼はこの教えを持ち込んだ者の事を「反キリスト、偽預言者、死に至る罪を犯している者」などと呼んでいます。また「**彼らは私たちから去っていきましたが、もともと仲間ではなかったのです。**」（I ヨハネ 2：19）とありますから、最初は教会員だったのでしょう。でも教えに満足せず、グノーシスの教えに引かれて行き、教会から離れていったようです。

「グノーシス」というのは知識という意味で、もともとペルシャから始まったものですが、すべてを善と悪に分ける「善悪二元論」が根底にあります。彼らは精神的なこと（学問、知識）は善であり、肉体的なことは悪であると考えました。私たちの肉体はすぐに病気になり、老化し、限界があり、罪の道具になってしまいます。特に悪い習慣や依存症などは、まるでこの肉体が悪であるかのように錯覚させるのです。これがキリスト教に入ってくるとどうなるかという、

①こんな弱い肉体を創った神は悪い神（程度が低い神）であり、イエス様を通して語られた神は、精神的に高度な教えなので良い神として、旧約の神と新約の神を分けて考えるようになりました。しかし旧約の神と新約の神は同じ神であり、肉体も霊も神が創造されたものです。神がお創りになったものは全て良い物であり、肉体は汚れていません。むしろ魂の病い、知性の歪みが肉体に現れ、肉体を巻き込み犠牲にしているのです。

②【受肉を否定すると大変なことになる】

②さらに、神がこんな汚れた肉体をお取りになるなんてことはあり得ないとして、神が人になるという受肉を否定するようになります。イエス・キリストというお

方は本当の人間ではなくて、靈的な体で現れたのだと教えました。(仮現論)

③さらに、受肉を否定するのですから、イエス様は処女から生まれたのではなく百人隊長とマリアから生まれた単なる人間であって、洗礼の時に神の靈が降って「神の子キリスト」になり、一時的に神は人間の体の中に宿っていたが、十字架の苦難の時、神の靈は去り、苦しんだのは単なる人間イエスであると主張しました。(養子論)

④さらに、知識で人は救われるのですから、愛の実践はいつでもよいと教えました。韓国の「救援派(グッド・ニュース宣教会)」がそうです。彼らは自分にはもう罪はない、救いを悟ってさえいれば社会秩序に反しても(殺人を犯しても)罪にあたらぬ、自分を「罪人」と思っている多くのクリスチャンは死後地獄に行くことと解釈します。「あなたは義人ですか? 罪人ですか?」と質問し、「罪人です」と答えると「あなたは本当の救いを得ていないから地獄に行く」と不安をあおり、自分たちの教えに引き込みます。この教えの信者は今20万人いるといいます。ゆえにヨハネは「自分に罪がないと言うなら、自らを欺いており、真理は私たちの内にはありません。」(Iヨハネ1:8)と語り、兄弟を愛することを語ります。「正しい生活をしない者は皆、神に属していません。自分の兄弟を愛さない者も同様です。」(Iヨハネ3:10)「その掟とは、…この方が私たちに命じられたように、互いに愛し合うことです。」(Iヨハネ3:23)

このような異端の教えを理解して、この手紙を読むと良く分かると思います。ヨハネは受肉を主張し、福音書で「言葉は肉となって、私たちの間に宿られた。」(ヨハネ1:14)と語り、手紙でも「私たちが聞いたもの、目で見えたもの、よく見て、手で触れたものを伝えます。すなわち、命の言について。」(Iヨハネ1:1)と語ります。またキリストの十字架の苦難は、本当の肉の苦しみであると語り、「この方は水と血を通して来られた方…水だけでなく、水と血によって来られたのです。そして靈はそのことを証しする方です。」(Iヨハネ4:6~8)と書きました。水は洗礼を意味し、血は十字架を意味しています。神は本当に人となり、苦しみを受け、血を流されたのだと証したのです。キリスト教信仰は肉をもって神の子が生まれたことに意味があります。イエス様は架空の人ではなく、本当に歴史の中で生きて下さった方です。だから歴史の中で希望を失っている私たちは希望を持てるのです。

●榎本牧師がこんなことを書いています。「キリスト教信仰は、どこまでも神の働きかけに対する私たちの感動から生まれたものである。こんな私に対して神はかくも大きなことをして下さった、こんな大きな犠牲を払って下さった、ということがいつもはっきりしていることが、一番大事なことである。…どうすれば教会は世の為に尽くすことができるかというようなことだけを考えて、それはもっと皆が協力したらよいとか、話し合いをしたらよいと言いやすい。そのようなことでキリスト教信仰が出来てきたのではない。」

受肉を否定すると、単なる人間イエスという一人の偉人の話になるのです。私たちもその偉人さんに倣おう、そして苦しんでいる人たちの友となろうとなり、それがキリスト教だといって人間の業、道徳になるのです。ユダヤ教にはメシアが何人もいますが、すべて人です。人は人を救えません。神でなければ人を救えず、人でなければ模範になれません。神の救いと、そこから溢れる隣人愛、霊と肉のバランスが大切なのです。

③【私たちはすでに神の子であること】

「御父がどれほど私たちを愛して下さるか、考えなさい。それは私たちが神の子と呼ばれるほどで、事実また、そのとおりです。」(Iヨハネ3:1)

「神の子」という言葉が出てきます。亡くなった野村監督が田中将大(まさひろ)選手のことを「マー君、神の子、不思議な子」といいましたが、日本人は能力が優れていたり、天才的な人の事を簡単に「神の子」といいますが、そういう意味ではありません。神の子というのは神の性質をもっているものであり、イエス様だけです。だからイエス様のことを「神の独り子」と呼びます。人間は神の性質を持っていません。私たちはどんなに努力しても、自分を磨いても自分の力では「神の子」には成れませんが、洗礼によってキリストと一体になり、恵みによって「神の子」になったのです。そしてキリストの力により、神の性質が浸透してゆくのです。これらはすべてはキリストの業です。

「王子と乞食」という童話があります。イギリスのエドワード六世を主人公とした冒険のお話です。王子エドワードと乞食のトムは双子のようにそっくりな顔をしていたので、互いに来ている服を交換することから物語が始まります。トムがどんなに自分は本当の王子ではないと事情を説明しても、王宮にいる家来たちは王子エドワードとしてしか見てくれません。これと同じで、私たちも神の王子の服を着せられたようなものなのです。「洗礼を受けてキリストに結ばれたあなたがたは皆、キリストを着ているからです。」(ガラテヤ3:27)とパウロは言いましたが、その通りなのです。目には見えませんが、着ているのです。それを脱いだら大変なことになります。

私たちは、頭では自分は「神の子」だと知っているのに、それが少しも力にならないのは、自分を見るからです。プロテスタント教会は、 sacrament(神の業)を強調するのではなく、人間の業を強調する傾向があります。特にピューリタン(清教徒)と言われる人たちの影響を受けて、清く、正しくあることがクリスチャンだと思っていますから、自分の言動を見て「ああ、自分は駄目だ」と思ってしまふのです。しかし信仰は、自分を見たり、現実を見るのではなく、キリストの業と聖書の言葉から見ていかなければ駄目です。私は祭服を着ます。最初に来た時、「自分がこんなものを着ていいのだろうか」と思いました。でも祭服は着せられるものなのです。中身がどんなに貧しくても、その人が祭服を着たら神の道具になるのです。そして祭服を着るたびに、心が引き締まり、少しでもそのように成りたいと思うのです。これが大切なのです。イエス様の弟子たちは無学な漁

師が大勢いました。そんな者たちが自分の立派な業で働けるわけがないのです。でも漁師でもキリストを着たら、悪霊は逃げて行き、病人は癒され、神の言葉を語る者とされるのです。そして次第にその方に似た者になってゆくのです。私たちは既にそのような「神の子」であると信じていただきたいと思います。家族の為に祈るなら、彼らを天に引き上げることができます。手を置けば御心なら癒していただけます。

「愛する者たち、私たちは、今既に神の子ですが、自分がどのようになるかは、まだ示されていません。しかし、御子が現れる時、御子に似た者となるということを知っています。なぜなら、そのとき、御子をありのままに見るからです。御子にこの望みをかけている人は皆、御子が清いように、自分を清めます。」(Iヨハネ3:2~3)

再臨するキリストは神的な肉体をもって現れます。グノーシス派のいうような単なる霊の復活ではありません。信条は「身体によみがえりを信ず」と語ります。それは目で見ることが出来るものです。体によみがえりは、人間の死への勝利を表しており、私たちの希望です。キリストが再臨される時、私たちは御子に似た者になり、完全に救われます。それまで私たちはまだ中間地点にいるのです。救いは私たちの中で既に始まっていますが、まだ完成していません。私たちは救われつつあるのです。誰もがこの信仰を持てるものではありません。多くの人が反れて行き、離れてしまいました。信仰は与えられるときはタダです。しかしそれを守ることは人間の努力が必要です。悪の力は何とかして皆さんの信仰をなくそうと働いているからです。謙虚になって、教えられたことにとどまり、永遠の命を獲得しましょう。